

資本主義と労働者階級

吉 澤 昌 恭

I

「資本主義」という名称を冠せられる西洋の社会体制は、19世紀以来激しく批判され続けてきた。そうした批判の急先鋒たる社会主義者曰く、資本主義社会とは労働者の搾取される社会である、と。曰く、資本主義は社会の最も弱い人々の生活水準を押し下げるといことの上に築かれたのである、と。

しかし20世紀になると、一方的に資本主義を非難し社会主義を賛美することは難かしくなった。社会主義が、単なる思想或いは社会運動の段階に止まっていることをやめて、現実のものとなったからである。当然、現実の社会主義体制の非を鳴らす人も登場してきた。かくして資本主義の得点は相対的に上昇した。しかし、それはあくまでも相対的なものであった。というも、社会主義は資本主義よりもはるかに悪い、と考える人ですら、その多くが、19世紀の資本主義もやはり悪かった、と考えているからである。こうした態度は Eucken や Röpke に典型的に認められる。¹⁾

しかし本当に、「資本主義」という名称を冠せられる19世紀の西洋の社会体制は、一般に言われている程に悪いものであったのだろうか？産業革命は、そして工場制度は労働者階級に何をもたらしたのだろうか？

1) Eucken, W.: *Grundsätze der Wirtschaftspolitik*, Tübingen 1952. // Röpke, W.: *Die Gesellschaftskrisis der Gegenwart*, Bern-Stuttgart 1942/*Civitas Humana-Grundfragen der Gesellschafts- und Wirtschaftsreform*, Erlenbach-Zürich 1944,

II

イギリス経済史の研究者はしあわせである、と Ashton は言う²⁾。というのも18世紀から1850年代に及ぶ、Royal Commissions and Committees of Inquiry の歴大なレポートを利用することができるからである。しかし、Ashton によれば、このレポートは成程立派なものであるし、経済史家の依拠すべき文献ではあるが、ある偏りを持っている。それは、社会的悲嘆 (social grievance) を取り扱ってはいるが、経済発展の通常のプロセスを取り扱っていないからである。

もっとも、そのレポートを丹念に読むならば、社会的悲嘆の原因は急速に過去のものとなりつつあった法・慣習・社会組織にある、という結論が得られるはずである、と Ashton は言う。即ち、所得の最も低かったのは工場労働者ではなくて、18世紀の伝統と方法を引き継いでいる家内労働者 (the domestic workers) であったし、また、雇用条件の最も悪かったのは蒸気動力を使用する大工場 (the large establishments) の下に於いてではなく、屋根裏部屋や地下室 (the garret or cellar) の作業場に於いてであったし、更に、個人的自由の抑圧や現物支払いの悪習 (the evils of truck) が最も顕著であったのは発展しつつあった工業都市や鉱山地帯に於いてではなく、それらから遠く離れた村々に於いてであった、というのである。

しかし、この歴大なレポートを丹念に読むという忍耐力の持主は少なかった。困窮に関するよりセンセショナルな証拠を取り出して、それを搾取のドラマに仕立てあげるのがはるかに容易である。文学の領域に於けるロマン主義の復活はこのことに一層の拍車をかけた。農業労働や家内労働が理想化される一方で、様々の革新に対するあからさまな敵意が示された。

2) Ashton, T. S.: The Treatment of Capitalism by Historians, in: Hayek, F. A. (ed.): *Capitalism and the Historians*, Chicago 1954, p. 33-38.

事実はどうであったのだろうか？ Bowley と Wood の研究以来、産業革命の帰結に対するベシミスティックな見解は徐々に後退しつつある、と Ashton は言う³⁾。というのは、彼らの研究によって実質賃金の上昇カーブが示されたからである。勿論事態は単純なものではない。19世紀前半のイングランドの人口は、一部は自然増によって、一部はアイルランドからの移民によって増加した。熟練を持たない人々の所得は低いままであり、また彼らの所得の大部分は技術進歩によってほとんど価格の下ることのなかったもの、即ち、飲食物や住宅に費消された。しかし他方で、より良い支払いを受けた熟練労働者が成長しつつあったのであり、彼らの貨幣所得は上昇しつつあったばかりか、彼らは所得のかなりの部分を、工場制度の導入の結果大幅に価格の下ったものへと振り向けていたのである。真の問題は、これらいずれのグループが増大しつつあったか、である。今では一般に、大部分の者の実質賃金は上昇した、ということが認められている。

工場での労働環境はいかなるものであったのだろうか？ *Economica*, March 1926 に発表され、*Capitalism and the Historians* に再録されている論文⁴⁾に於いて、Hutt はひとつの解答を与えている。彼は工場での児童労働に焦点を当てながら論を進めている。

Hutt は 1832年の Sadler's Committee の決定的重要性を指摘する。この委員会のレポートは、工場で働く児童の虐待、困窮、疾病、不具についての陰惨な像を提示しており、一般にそれは確実なものとして受け入れられてきたのである。今日、Hutchins と Harrison の *A History of Factory Legislation* 並びに Hammond 夫妻の *The Town Labourer and Lord Shaftesbury* は、初期の工場制度についての標準的な著作であるとされている。これら両者は Sadler's Committee のレポートに大きく依拠したものである。Hammond 夫妻は、この委員会のレポートを当時の

3) *ibid.*, p. 38-39.

4) Hutt, W. H.: *The Factory System of the Early Nineteenth Century*, in: *Capitalism and the Historians*.

工場での生活状況を知るための主要な資料のひとつであるとしているし、Hutchins と Harrison はそれを工業の諸状況についての最も価値ある資料集のひとつであるとしている。

しかし、Hutt は、Sadler's Committee のレポートは党派的なものであった、という裁定を下している。更に Hutt は、Sadler's Committee のレポートの不自然さは党派間の争いに加わることのなかった多くの工場制度の反対者によってすら認められていた、ということを指摘する。

それでは実態はどうであったのだろうか？工場で働く児童の健康並びに道德の状態を精確に知ることは容易ではない。しかし、医療関係者の証言は、それらのことを知る上での最も価値ある資料のひとつとなるであろう。彼らの証言をどう解釈するかに関して、Hammond 夫妻並びに Hutchins と Harrison の見解と Hutt の見解とが食い違っている。Hutt は1816年の Peel's Committee のレポートと1818年の the Lords' Committee のレポートを比較検討している。Peel's Committee に呼ばれた9人の医師の大部分は工業について何も知らず、単に抽象的な見解を述べたに過ぎない。即ち、彼らは、これこれの状況下ではしかじかのことが起るであろう或いは起るはずである、ということ述べたのに過ぎないのである。それに対して the Lords' Committee に呼ばれた医師達は、実際に工場で働く児童達を観察した上で、工場で働く子供達は少なくともそうでない子供達と同じくらい健康である、と述べたのであった。

Hammond 夫妻並びに Hutchins と Harrison は Peel's Committee のレポートを受け入れ、the Lords' Committee のレポートを斥けている。彼らは、the Lords' Committee に呼ばれた医師達には党派的の偏りがあった、と言うのである。しかし、Hutt はこうした意見を根拠のないものとして斥ける。そして the Lords' Committee のレポートを高く評価しているのである。

その後工場制度に反対の態度を示す人々の幾つかの見解を吟味した後、Hutt は二つの結論を提示している。①レッセ・フェールが放棄され

る以前の工場制度を特徴づける「悪弊」(evils)を誇張し過ぎる傾向が存在した。②工場法の制定(factory legislation)がこの「悪弊」の究極的な消滅の最も根本的な要因だったのではない。つまり、経済発展の後に於いてのみ、初めてこの「悪弊」の消滅が可能になったのである。

都市に於ける住宅事情はいかなるものであったのだろうか？確かに、現代の西洋文明を基準にするならば、19世紀中頃のイングランドに於ける住宅事情は劣悪なものであったし、都市の衛生状態も嘆かわしいものであった。しかし、当時の状況がそれ以前よりもはるかに悪いものであったというようなことは決してない、と Ashton は言う。⁵⁾

しかし、更に重要なのは、こうした劣悪な住宅事情や嘆かわしい都市の衛生状態の責任の所在はどこか、ということである。Ashton によれば、⁶⁾悪かったのは機械でも産業革命でも、ましてや投機的なレンガ職人や大工でもなく、住宅不足が根本問題だったのである。一方には、自然増とアイルランドからの移民による人口増加があり、他方で、人為的に高められた利子率や種々の課税は住宅建設のコストを上昇させた。こうした状況の下で、相対的に貧しい人々に住宅が供給されるべきだとすれば、それはより小さく劣悪なものとならざるを得ない。こうした事情を考え合わせるならば、住宅事情や都市の衛生状況を理由にして産業革命や工場制度の非を鳴らすことは不当である、ということになろう。

III

経済理論を修得し、それに基づいて経済発展の歴史を研究しようとする経済史家達の努力によって、19世紀前半の労働者の置かれていた状況が解明されてきた。しかし、彼らの研究成果は未だ十分に受け入れられるに到

5) Ashton, T. S.: *The Treatment of Capitalism by Historians*, in: *Capitalism and the Historians*, p. 40-41.

6) *ibid.*, p. 41-49.

っていない、と Hayek は言う。⁷⁾ というのも、それが知識人達の一般的先入主と容易に符合するような類のものではないからである。

今でも歴史的な神話が生き続けている。こうした神話は容易に消滅しない。その中でも極めつきの神話は、「資本主義」或いは「工場制度」の勃興が労働者階級の地位を悪化させた、というものである。

一体こうした神話はどこから生まれてきたのだろうか？ Hayek は神話の源泉として次のようなものを挙げている。⁸⁾ ①富と福祉の増大②工場主と敵対関係にあった地主階級③社会主義思想④理論的先入主なしに事実を把握しようとした経済史家。

富と福祉の増大は、人々の生活水準を高めたばかりか、その欲望をも高めた。久しく自然で不可避的な状況と思われていたことが、否それどころか、過去に比べれば改善と思われることすらが、新時代が提供すると思われるものと両立しない、と考えられるようになっていった。悲惨な状況が存在する、ということが盛んに申し立てられてきたけれども、それが以前と比べてよりひどくなったのかどうかは疑問である。悲惨への憤慨が増大したからといって、それが悲惨な状況が増大したことの証拠とはならないのである。

また、産業労働者の存在は地主や都市貴族にとって不快なものであった。彼らは新興の工場主にあからさまな敵意を示している。彼らの党派的な見解は社会主義思想と結合することによって広く流布していった。マルクス主義、フェビアン社会主義、講壇社会主義、制度学派の影響の下で、歴史的な神話が定着していったのである。

経済史家達もこうした神話を強化した。彼らは理論的先入主なしに事実を把握しようとした。しかし、体系的理論なくしては、複雑な社会現象を正しく理解することは不可能である。もし、理論なしに事実を理解しようと

7) Hayek, F. A.: History and Politics, in: *Capitalism and the Historians*, p. 26-27.

8) *ibid.*, p. 17-26.

するならば、それを試みた人は、容易に、その時代に広く行き渡っている俗説の犠牲者となる。そして、こうした俗説を正当化するような個々の事例を見い出すことは容易である。かくして、経済史家達は俗説を受容しつつ、しかもそれを強化していったのである。

理論なしに事実を理解しようとした歴史家は単なる fact-finder であつたといえる。もしそうであるならば、彼らの態度は、当然、その時代の俗説を、従って知識階級 (intelligentsia) の態度を反映したものとなる。そうだとすれば、何故に知識階級が反資本主義的な感情を抱いていたのか、ということが真に重要な問題となる。

この問題についての Jouvanel の見解を見ることにしよう。⁹⁾

産業革命期以降の西洋の知識人 (intellectuals) の資本主義への敵意は情緒的なものと倫理的なものに区分できる。彼らは心情的には労働者へのシンパシーを抱いている反面、資本家に対して反感を持っている。また倫理的には、資本主義体制の冷酷さと不正義を糾弾する。しかし Jouvanel によれば、まことに逆説的なことに、資本主義体制の欠陥が緩和、軽減され、資本家の社会的有用性が大いに増大しつつあった時期に、即ち、1830年代以降に、資本家に対する知識人の反感が一般化していったのである。

資本家に対する知識人のこの反感は、結局、両者の大衆に対する態度の相違に帰着する。「顧客は常に正しい。」「大衆に欲するものを与えよ。」この二つの格言に資本家の大衆に対する態度を集約することができる。しかし、知識人はそれを受け入れることができない。彼にとって、利潤を得るために大衆に迎合することなどもってのほかである。しかも、彼の高邁な理想は決して大衆に理解されることはない。資本家は榮えてゆくのに、知識人は常に冷遇される。かくして、知識人は資本家に対して敵愾心を燃やしていったのである。以上が Jouvanel の見解である。

9) Jouvanel, B. de: The Treatment of Capitalism by Continental Intellectuals, in: *Capitalism and the Historians*, p. 98-121.

工場制度によって大衆の消費水準の上昇が可能になりつつあったその時期に、資本家への知識人の反感が増大していった、ということはまことに注目に値することである。ここで論じられている知識人にはある混乱があるように思われる。即ち、彼は大衆（労働者）にシンパシーを感じていながら、そうかといって完全に大衆を信じきっていないのである。こうした混乱の背後に、快楽以外の価値の尺度に顧慮することのない快楽主義 (hedonism) への、知識人の敵意を嗅ぎることが可能なのではないだろうか。

IV

Hayek は、自由を他者の恣意的強制のない状態¹⁰⁾と定義している。また彼は個々人が追求すべき目標に言及することがない。そして、モラルを高揚させようとする努力は、当初の意図に反して、思いもかけない帰結をもたらすことがしばしばある、と考えている。こうした考えを持つ Hayek とそれに共鳴する人々の論文から成る論文集 *Capitalism and the Historians* には快楽主義への敵意は存在しない。そして、大衆の欲求に奉仕するビジネスが大いに奨励されている。

第二次大戦後ビジネスの重要性が改めて認識されるに到った。しかしこの時代は、福祉国家の理想が支配した時代でもあった。そして、近年福祉国家の理想のみがひとり歩きを始めたようである。ビジネスの生み出したものによって人々の福祉を向上させる、といった考え方が動揺しつつある。ここに今一度ビジネスの意義を考え直すことが必要であるように思われる。

10) Hayek, F. A.: *The Constitution of Liberty*, London and Henley 1960, p. 11.